

大好きなオレンジの家

新潟県 新潟市立上山小学校 六年

江端 祐香里

私の家から徒歩一分。オレンジとピンクを混ぜたような明るい色の壁を囲むように、緑の木々。遠くから見ると、おしゃれな洋館に見える私の大好きな場所である。

私の両親は共働きで、朝は早く夜は遅い。そのため、私は、保育園や小学校で過ごす以外の時間を、ほとんどこのオレンジの家で過ごしてきた。

ほとんど毎日、この家に行くのに、ドアを開けると、まるで久しぶりに会ったかのように喜んでくれるのは、私の大好きな祖父母である。

祖父は、保育園の帰り道、自転車の後ろに乗せて公園巡りをしてくれた。祖母は、折り紙やぬり絵、ままごとなど、一緒に遊んでくれた。五年間にわたる保育園の送り迎えは、雨の日も雪の日も、祖父母二人でしてくれた。

そんな日々に変化が訪れたのは、私が一年生の秋、音楽発表会の朝だった。いつものように、私の朝ごはんを準備していた祖母の左手から、お皿がこぼれ落ちた。持っては落としそれが三回も続いた。脳梗塞だった。

祖母はその日以来、大好きな料理や裁縫はもろろん、自分の足で歩くことができなくなり、車いす生活となった。

あんなに器用だった祖母は、身の回りのことができず、辛いはずなのに、私が寄ると、

「その服新しんじゃない？かわいいわよ。」

と、声をかけてくれ、私の変化に素早く気付いてくれる。おかげで私は、嫌なことがあってもすうつと忘れることができる。

祖父は、元学校の校長をしていて、仕事一筋だったそうだが、しかし、前はサランラップの切り方も分からなかったのに、この四年でカレーや炒飯も作れるようになった。コンビニシが行かなかったのに、今は四〜五軒のスーパーを日によって使い分けている。

二人とも、明らかに大変な状況なのに、祖母が倒れる前に比べて二人はずっと仲良くなったように見える。祖父なんて、夜中も祖母のトイレに付きそい、全然眠れていないのに「おばあちゃんが倒れなければ、新しい発見がなかった。この年になってまだまだ学べるなんて感謝だな。」

ワハハと大きく笑う。そんな姿に勇気をもらうと共に、二人の笑顔は、やっぱりオレンジの家の明るさにびつたりだと心から思う。

祖母は左半身まひなので、左側の手足が全くきかない。祖父の負担を軽くするために私は、祖母の食事エプロンをつけ、ごみ箱を右側に移動する手伝いをしている。幼いころ身の周りの世話をしてもらっていたように、今度は私が祖父母の手となり足となっていく。

そんな私の夢はただ一つ。長生きをして、私の結婚式に出てもらうことだ。

それまで私が何でも手伝うよ。今まで支えてくれて本当にありがとう。そしてこれからもよろしくね。さあ、今日も明日も、オレンジの家へ行こう!!